

「石のころ」

マルコによる福音書 14章66節～72節

説 教

川俣 茂 牧師(清教学園中学 宗教主事)

この箇所には2人の主役がいます。一人は毅然とした態度で神の御心に基づいてしっかりと立ち、決して揺らぐことのない人物、もう一人は「死ぬまでついていく」と豪語しながら、「ナザレ人イエスの仲間ではないか」と言われ、結局しどろもどろで、信念も何もあったものではないという人物でした。

確かにペテロはどこまでもついていくつもりだったのかもしれませんが。それゆえ、大祭司の屋敷の中庭に入り込み、人々と共に火にあたっていたのでしょ。しかし「遠くから」ついていった。福音書記者は、主に対して距離を置くことになったペテロの姿を象徴的に描いています。しかしそのような中、女中の一人が突然「あなたもあのナザレ人イエスと一緒にいた」と発言します。そこからは本当に坂道を転げ落ちるようでした。最後には「にわとりが二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と主イエスに言われたことを思い出し、物陰で男泣きに泣き続けました。この時、自分の「弱さ」「石のような心」を嫌というほど思い知らされることになったのです。

ペテロは火にあたっていました。しかしその火、つまり「光」が自分を照らし出すということに気づいていなかった。隠れてコソコソついてきた自分の姿を照らし出す光ということに気づくことはありませんでした。結局、隠し切ることはできず、自分の偽りをさらけ出してしまふことになったのです。ヨハネによる福音書で主が「光」とたとえられていることを合わせて考えてみると、ある意味、当然といえば当然だったのかもしれませんが。

そのペテロは驚くべき行動に出た。「あなたがたの話しているその人のことは何も知らない」と言い張って、激しく誓いはじめた。本来なら神の前で真実を「誓う」というように、ある種の信仰的な表現のはず、一般的には口にはできないはずなのに、相反する形で用いてしまっています。新共同訳では「呪いの言葉さえ口にしなから」とまで記されてしまっていますが、それくらいの発言をペテロはしてしまっていたのです。

確かにこの出来事は「人間というものは本当に弱いものだ」という代表的な出来事として代々読み続けられてきました。確かにそうかもしれません。しかしだからこそ、キリストの教会を代表する者として神によって立てられることにもなりました。彼はなぜ男泣きに泣き出してしまったのでしょうか。それは主イエスの言葉を思い出したからです。まるで「わたしの言ったとおりだっただろう」と言っているかのとき主イエスの言葉を、です。

彼が涙を流した時、彼の中の何かが音を立てて崩れていきました。それは「石のころ」でした。結果的に自分自身を否定し、主イエスを、そして救い主である主イエスを否定し、父なる神をも否定してしまふことになります。

しかしこの涙は見守られていました。ほかならぬ父なる神が見守って下さっていました。それがあったからこそ、復活の主イエスがペテロを訪ねるといふ出来事も起こったのではないのでしょうか。だからこそ、ここでのペテロの涙は単なる「自己嫌悪の涙」ではなく、主による恵みに対する懺悔と信頼と感謝と涙であるといえるのではないのでしょうか。

ここでの彼のつまづきは、その生涯で彼が十字架の恵みを覚え、福音伝道に邁進する際、また説教する際の原点になったに違いありません。そこにこそ実は「神の愛」が満ち溢れるという出来事が起こっているのです。

この出来事は教会の中でも本当に大切にされてきました。ペテロが主の教会を建て、使徒の筆頭格であったとしても、この出来事は消されることなく、語り伝えられてきました。なぜなら、福音書が真剣に「罪」というものを取り扱ったからこそ、「罪の赦し」、つまり主による十字架の贖いによる「赦し」が為されたから、私たちにとって、とても重要な事実が示されると同時に、この出来事を聴く一人ひとりがこのペテロの涙の意味、そして重み、そして主の憐れみを知っているからではないでしょうか。

(記 川俣 茂)